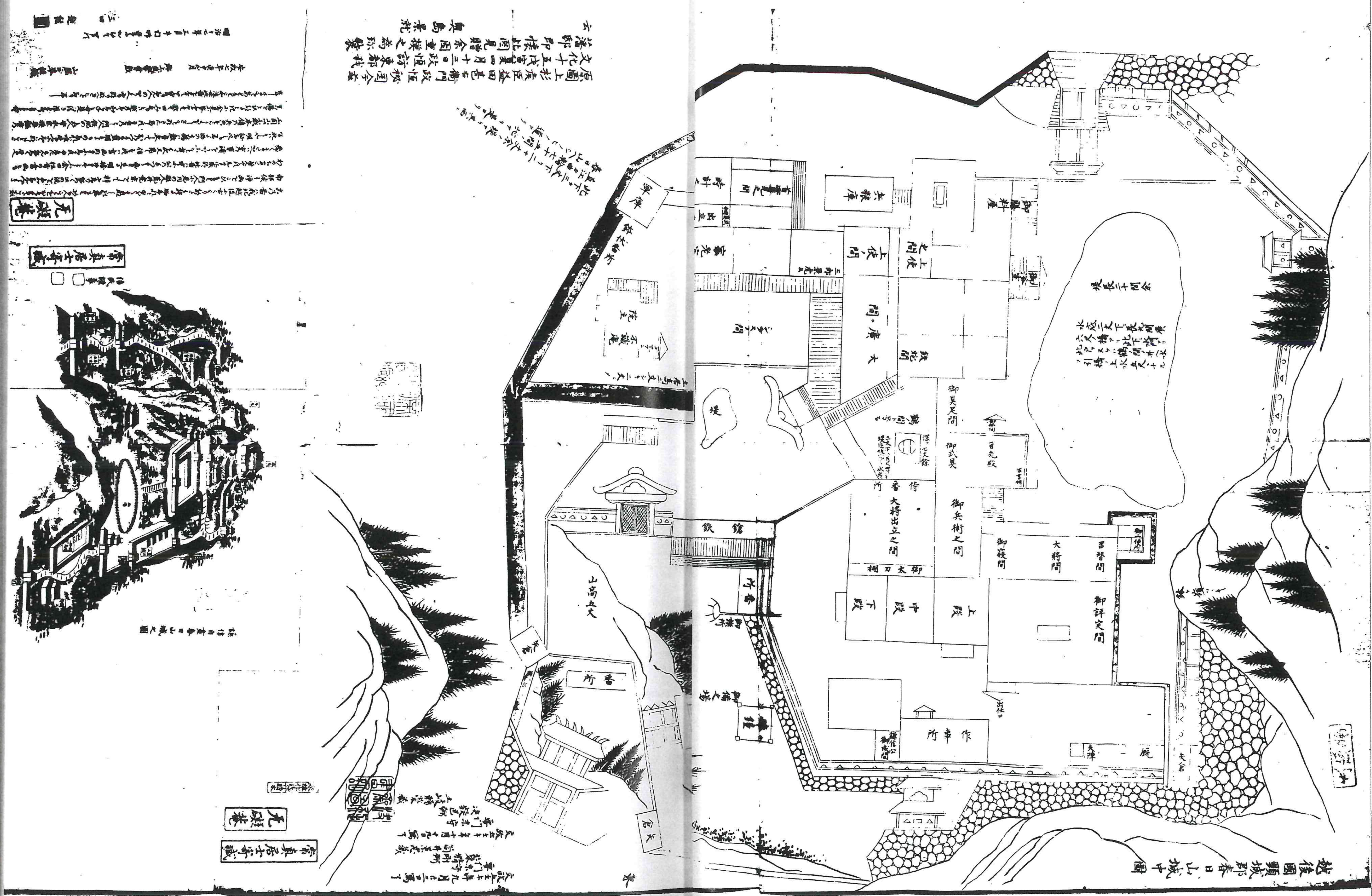
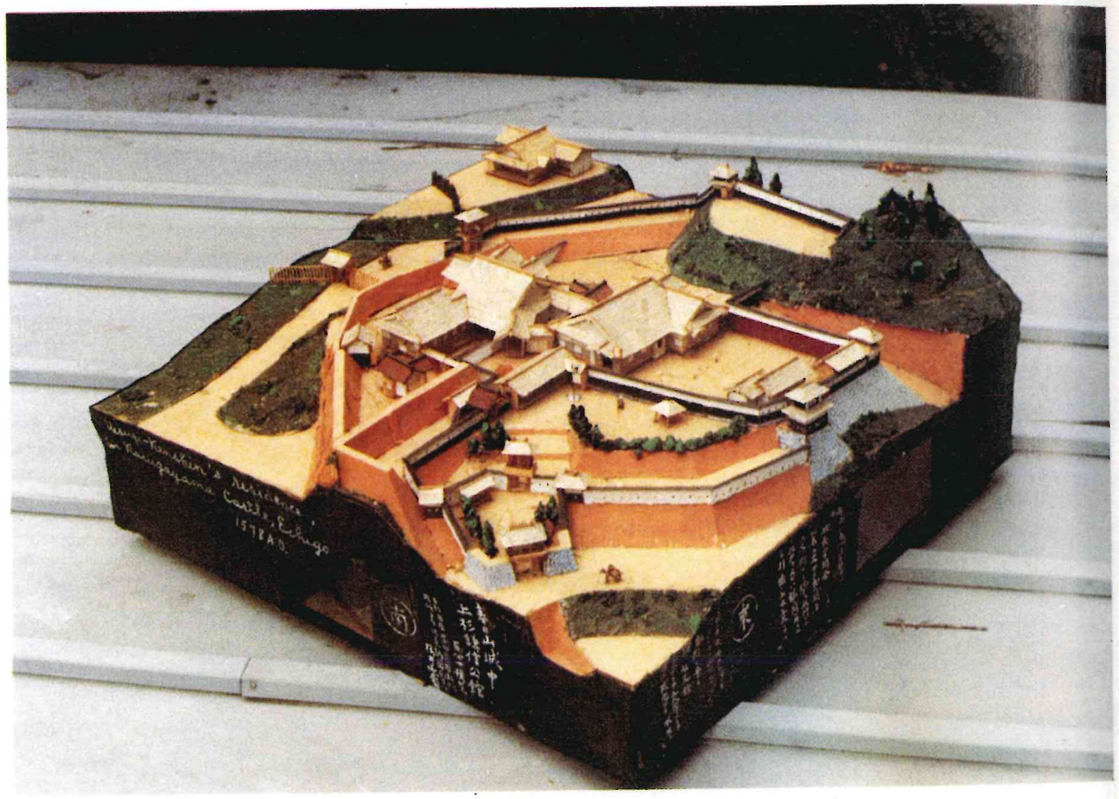
資料１

春日山城の上杉謙信公屋形

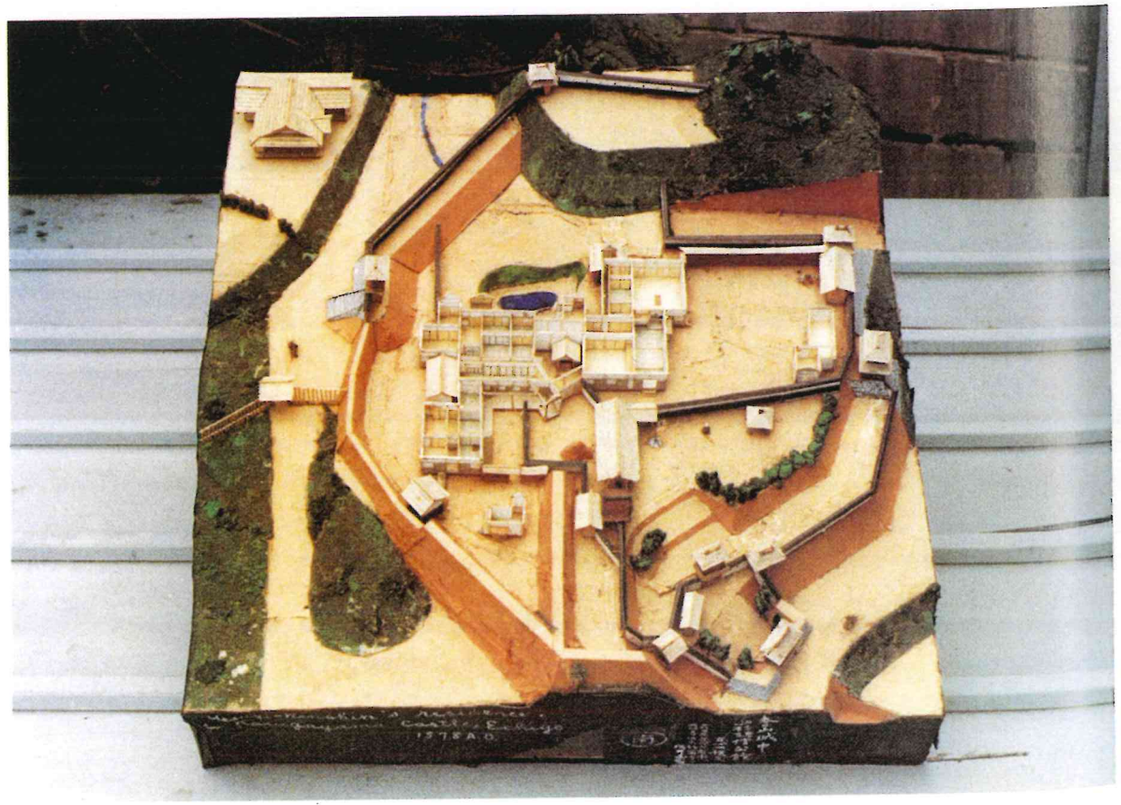


春日山城中　上杉謙信公屋形



春日山城中上杉謙信公屋形推定復元百分の一模型　外観　（著者作製）

春日山城推定復元三百分の一模型　東南面



春日山城中上杉謙信公屋形推定復元百分の一模型　内部

春日山城推定復元三百分の一模型　西北面　（著者作製）

屋形図の発見　上杉謙信公は理想主義の権化で、一生を毘沙門天のように強く清く生き通した英雄だったために、古来全国的に敬慕されている。そしてその本拠であった春日山城址はよく保存に注意され、訪れるひとびとが絶えないのであるが、しかしその居館の詳細や日常の生活ぶりははなはだ不明であった。（口絵二〜三頁参照）

春日山城址の地図はたくさん流布しているが、それは廃城後九十三年を経た元禄十五年（一七〇二年）の図が最古といわれ、いずれも図中に描かれている建物の姿は信用できず、部将邸の主の名も図によって異り、なかには山本勘介のような武田信玄の家臣の名を千貫門の前に記入した図もある。これは川中島の戦記に出てくる名を有名ならなんでも上杉方と思い違えて書き込んだのかも知れない。また上杉景勝転封後に城主となった堀家の時代にできたと称される監物堀（けんもつ）がどの図にも記入されている。こうして古い図がないので謙信時代の居館の図が残っているとは多分誰も知らなかったであろう。ところが昭和四十七年春、作家江崎俊平氏から国会図書館にそうした図が所蔵されていると教えられ、驚いて調べて見ると果して存在していて、しかも明治年間から上野公園の帝国図書館に蔵されていたこともわかった（口絵四〜五頁参照）。そのときまで知られずにいたのは、書名目録の題名が誤っていたからであろうかと思われる。書名目録には単に「春日山城図」とあったので、誰しも上記の世上に流布している図としか考えないから、わざわざ借り出して見る人の少なかったのは当然であろう。図には城中図と題してあるので、もしカタログにそのとおりに載っていたら私も見ずにはいなかった筈である。

この図は内容から命名すれば春日山城中上杉謙信公屋形図とでも称すべきであるが、その信憑性がまず問題になる。図には左下に、

「原図上杉侯臣益田甚右衛門政恒秘図今茲（ここに）文化十五戊寅夏四月十三日政恒訪二東都我藩邸一　即懐二此図一見（よに）レ贈（おくらる）レ余、因（よって）重模（ねて）レ之　為二珍襲一云。奥島景就」

とあって上杉侯の家臣によって世に出たことが記されている。米沢の上杉神社に問合わせたところ、益田甚右衛門は同藩の軍学者で、三の丸に邸を持つ重臣であったという。図の右下には文政五年（一八二二）九月二十三日と同年十月十九日の伝写を経たことを書き、その伝写した人の名の肩書に「要門末守」とあるので、越後流軍学者が伝写したことがわかるが、越後流軍学というものは甲州流軍学が流行したために唱え出された新しいものと認められており、その軍学書の内容を検討すると上杉家の伝承をよく知っていないことがすぐわかるし、また著者の知る限りではどの書にもこの図の存在を記していない。したがってこの

図は越後流軍学とは別個に伝承したことがわかる。

またこの屋形図には「常真居士寄蔵」という印のある春日山全城の図が貼り付けてあり、それに明治十七年三月三田越鉉という人が写した旨が記入されているが、書体から見て屋形図も同じ人の写したものと思われる。その全城図の方には謙信自画と題してあるが、前記の多くの春日山城図の一種で、藤田能登のような謙信時代にはおらず、次の景勝時代にだけいた人の名を記入したりしてあるので自画の筈がない。

このようにしてこの屋形図が後世の写しであるとすれば、故址を発掘して柱跡を発見するより他に図の真偽を確かめる方法がない。そして図のとおりの柱列、建物の跡が出土すればまさに歴史上の大発見である。

故址　そこでまずこの屋形図によく一致する地形の土地を春日山城址のなかに探すこととなるが数年かかって方々調べた末に、本丸の南、景勝屋敷という地名のある丘の下にピッタリ当てはまる平地が見出された。

全城の概観　春日山城については、すでに多くの研究の積み重ねがあり、実測図は昭和九年文部省が行った精密なものがあって、その原図は失われたらしいが、幸い春日山旅館主故大島善吉老がその複写を持っていて、われわれは城郭研究家本田昇氏のおかげでその存在を知ったのである。また昭和四十年から翌年にかけて高田市文化財保護委員会によって精密な調査が行われ、伊藤正一氏によってその結果が公表されている（高田市文化財調査報告書第八集「春日山城」昭和四十二年）。春日山という名は昔山頂に春日社が祀られていたことに由来するが、その創建は諸説あり、古くは延喜式にも見える社ともいう。越後の守護上杉氏は有事の日に立て籠るべき要害としてすなわち詰（つめ）の城（じょう）として、この山頂に城を築き春日社は北隣の現在毘沙門堂と呼ばれる小丘上に移したものだという。とすれば最初は本丸と現在天守台と呼ばれている小丘だけの小さな規模で危急の場合、少人数でも守れる城だったわけである。しかし北隣の小丘もやがて謙信が城の内に取り入れたので、春日社は鎮守として山麓の現在地に鎮座することとなったという。春日社の古文書は焼失して現存しないが、徳川時代まで伝存していた由であるからこの伝えは真実であろう。応仁の乱後、戦国時代が長く続き実力の勝った者が権力を握るという下剋上の形勢が盛んになると上杉氏にかわって家老役の長尾為景、すなわち謙信の父が権力をふるい守護代となった。そして春日山城に居館を営んだという。その死後、子晴景が嗣いだが国内が治まらず、弟の景虎、すなわち後の謙信が守護上杉定実の執り成しで晴景から守護代をゆずられて、天文十七年（一五四八年）十二月、春日山城主となっ

たのであった。ときに謙信は十九歳であった。そして翌々年上杉定実が病死すると将軍義輝は謙信を越後の守護に任じた。したがって四十九歳で急逝するまで満三十年間の居城であった。

春日山城の規模を調べていると、有名な近江国観音寺城と同型であったことがわかってきて、城郭史上の位置づけもできる。

観音寺城は田中政三氏の説によると太古の近江の領主ササキヤマキミの朝鮮式山城があった痕跡が認められるという。推古天皇の世に聖徳太子が山頂から少し下った平地に観音正寺を建立した。この山に近江の守護六角佐佐木氏は詰の城として相当古い頃から築城をし、応仁の乱の頃佐佐木高頼がここに拠って京極氏や足利将軍と戦ったが、観音正寺を東南麓の観音谷に降ろして、その跡を城内としたと伝えられる。現在の観音正寺は廃城後、慶長年間に旧の平地に再び移されたものである。

佐佐木氏の居館は初めは城東の平野にある小脇にあったが、三代目の頼明は文中三年頃（一三七四年）城西の平野に金田の別邸を建てて住み、五代目の氏頼が父の菩提のためにその邸内に建立した金剛寺は現在もその位置にあって、観音正寺城から移したという小楼閣が玄関の上に載っている。

戦国時代になると平野の居館に住んでいるのは危険であるから、山麓や山上の比較的広い削平地に本邸を設けるのが一般の習いとなったが、観音寺城址登り口の西側にほぼ半町四方の邸址が発見されていて泉水の跡も認められている。また山上の現在観音正寺のある平地は、幅は三〇メートル足らずだが、長さは百五十メートルもあって、多くの建物を建てうる広さである。その西隣細道を経たところには本丸と称する平地とその南に三段になった削平地がある。昭和四十四年から翌年にかけて行われた本格的な発掘によって本丸跡に多くの礎石が発見され、その下の段には一部に滝や林泉の跡が出土し、一乗谷の館のような優麗な庭園の発掘が今後に期待されている。

春日山城址はこの観音寺山城に似ている。観音寺山は北が急峻で山頂には削平した小さい曲輪がいくつもあって、それらが水量に恵まれている。そのように春日山も西側が油流（あぶらながし）と称される絶壁で山上に本丸（標高一八〇メートル）櫓台（現称天守台一七九メートル）毘沙門堂（一七六メートル）があり、水量が豊富で本丸と櫓台の間の道を西に約十メートル下ると井戸曲輪があって、直径六メートル、深さ十メートルの大井戸があり、明治年間その一部を掘り崩すまでは満々と水をたたえていたという。明治初年、底からつるべ十二個、滑車、金属類が出たことがある。それは金の鞍

が沈んでいるという伝説があったので、それを取って儲けようとしたのであったが、つるべなどだけなので、それを売っても酒手にしかならなかったという。また櫓台の東下には茶屋という地名のある長さ百メートルで幅の広い細長い腰曲輪があって「笹の井」と呼ばれる清水が崖下に湧いており、小さいが水量は豊かである。北部は「人数溜」というが、台所衆居所と書いた古図もある。現在ここは二の丸と呼ばれているが本城に属する腰曲輪と考えられ、大坂城でいえば山里丸に当る風雅な茶室、茶庭のあった場所で、謙信、景勝等が松籟に心を澄ましながら茶の湯の禅味にひたったところであろう。茶庭に相当するところは展望にすぐれ、平野を越して米山が聳え、海を越して佐渡ヶ島が見える。謙信の句に「月澄めば猶静なり秋の海」というのがある。茶室について伝えるところはないが、謙信は上洛して紹鷗、利休に茶を学んでいるから、紹鷗好みの自在を吊った田舎間四畳半などだったかも知れない。屋形図に貼りつけられている全城図ではその茶室は宝形造で、円窓か半月形の窓に斜めに線が入れてあって、下地窓らしく見える。宝形造の屋根の茶亭は米沢市蔵、および林泉寺蔵の春日山城図にも同じ曲輪に描かれている。

居館址について調べると、古来越後の国府は直江津にあった。越後は大国であったから国府は方八町で、北辺中央に庁舎があり、その南の中央大路を挟んで東西に倉庫や官舎、市などが設けられていたのであろうが、その故址は未だ発見されていない。中世の守護上杉氏や重臣長尾氏の居館もその辺にあったのであるが、その位置もやはり未だわかっておらず、永禄元年（一五五八年）再び亡命して来た関東管領上杉憲政のために謙信が造営した御館（おたて）の位置だけがわかっている。それを国府および守護の上杉氏の邸の址だとする史料もある由である。さて直江津の屋形は平野にあった居館であって、詰の城たる春日山では北麓の黒金門を入って少し登ったところに「御屋敷」と伝称する曲輪があって、その奥に一段高く「右近畑」または「おこん畑」と呼ばれる平地があり、両者を合せると約一丁四方で武家屋形が建つだけの広さである。ここは近年城主の屋形址かと言われて注目を集めているのであるが、もし長尾為景の邸がここにあったとすれば謙信の誕生地はここだったかも知れない。この邸址の奥に上臈屋敷または女郎屋敷と呼ばれる平地がある。（こんな山奥に遊廓はあるまい）春日山ではここがもっとも高級な磁器の破片が出土するという。近江国京極氏の上平館（じょうへい）にも上臈屋敷というところがあって化粧井戸というものが残っている。上杉神社所蔵春日山城図には、この辺に上杉十郎と記入してあるが、十郎の音から推定したのであろうか。もっとも憲政の子に十郎という人がいた

が。

また春日山の東麓一帯は「中屋敷」と呼ばれるが、そのなかでも「御中屋敷」というところは、謙信の兄晴景が天文十三年（一五四四年）家督を謙信にゆずって移り、清風朗月を残生の友として閑居し、天文二十二年二月十日四十二歳で逝去した屋形跡で、永禄三年（一五六〇年）九月前関白近衛前嗣が春日山へきたとき、謙信は関東にあり翌年ともに春日山に帰ったが、中屋敷をその御殿としたという（「北越軍談」）。謙信は雪の深い冬季はここに降りて住んでいたと伝えられるが、『北越軍談』には謙信が中年から琵琶を好むようになり、雪の夜のつれづれに石坂勾当という琵琶法師を招いて平家を語らしめ、佐藤継信や斎藤別当実盛の節をたたえたと載っている。現在故址を訪れて見ると、春日山から流れてくる細流が南辺を洗って東南隅で北に方向を転じ御館址へ去って行くが、この地形は当時の洛中洛外図屏風に描かれている京都の武家屋敷さながらであって、東北隅の神社境内から石地蔵その他が出土していることも、そこに邸の持仏堂か鎮守のあったことを物語っているようである。謙信の死後、御館の乱が起り中屋敷の名は激戦地として記録されているから、屋形は焼失したであろう。現在中央を北国街道が南北に貫通しているが、もし発掘されて優麗な林泉や銀閣のような楼閣の跡などが出土したら幸いであると思う。

前記「御屋敷」の上の平地に謙信公を祀る春日山神社が鎮座するが、ここは元禄十七年の図に老母屋敷とあり、現在もそう呼んでいる。標高八八メートル、六〇メートルに七〇メートルの広さであるが、謙信、景勝、堀家が邸を持っていたところだと「頸城郡誌稿」にある。

当時の豪族は本邸の他にも屋形を持ち「御他屋」と称して迎賓館その他に使用するのが常であったから、城主の屋形跡はいくつもあってよいのであるが、本邸は乱世の続くにしたがって平野から山麓へ、山麓から山上の比較的広い削平地へと移って行くのが普通である。そこで謙信の本邸はどこにあったのであろうか。乱世のもっとも激しい時代であったから山上であるのが自然であろうと思うし、文献史料の方でも謙信は「御実城様」、養子景勝は「中城様」と呼ばれていた。

実城というのは山上の本城、本丸を指す方言で、新田氏に由縁のある土地に多い。命名の由来は「新田正伝記」、「同或問」等に記されているが、後醍醐天皇が吉野山に立て籠られたときの行宮は蔵王堂の北側にあって実城院といった。そのため新田義貞の孫の貞氏は、征東将軍宗良親王の皇子国良親王（薨じて円福寺に葬ると「新田正伝或問」にあり）を奉じて新田の金山城にいたので、その城は金山実城と呼

ばれ、金山城の武士は実城衆と呼ばれた。永正の頃「実城総堀御普請奉行金井左近繁信」がいた。現在も金山城の上に実城という地名が残っている。また新田義貞は越後の守護職に任ぜられ、その戦死後も子の義宗等は越後にいたことが多い。そのためか越後には新田氏の子孫が多く、謙信の三家老の一人でしばしば先陣をつとめた猛将柿崎景家も義貞の子孫と伝えられる。そのためであろうか、実城という語が越後で行われ、十日市には「御実城太鼓」という囃子が残っている。上野国でも本丸を実城と呼んだ例は、永禄四年謙信が小田原攻めから引き揚げて、たぶん松山城に馬を留めていたとき、前橋城にいた近衛前嗣が謙信に送った書状に、

「人質、成田、箕輪（長野氏）などにもミしゃう（実城）へまいり番をし候へ、政虎（すなわち謙信）るすの事われらに申つくべきよし申をかれ候よし申候て（下略）」

の語がある。これは前橋城が関東における謙信の根拠地であり、そこへ関東諸大名の人質を集めて置いたことを示す文書である。そのほか、謙信の武蔵騎西城攻めの記録にも実城の語があり、常陸国那珂郡那珂町の南酒出城址は御城というところにある。また千葉県にも小田原にも本城をみじょうと呼んだ例が残っているが、千葉県は新田氏の一族で義貞の実家である里見氏が移って勢力を握った地域である。

謙信が実城をはじめ春日山城各曲輪の防備を命じた手紙がある。それは天正元年（一五七三年）五月十四日、出征先から春日山城の留守を預っていた河隅三郎左衛門、庄田隼人に宛てた自筆消息である。いわく、

「又やまと（直江大和守実綱、兼続の養父）孫二郎（鮎川盛長）こし候間ふしん心やすく候てけんご（堅固）にみちゃう（実城）は申におよばず、二のくるわ　三のくるわまでへい（塀）に申つけへく候。又ぢんしゅ（陣衆）にさかいみやさきの竹木きらせましく候。きり候へバむらようがい（村要害）なおなおてあさ（手浅）に見なすものに候」

この手紙の日付より約一カ月前の四月十二日武田信玄は病死しているのであるが、謙信はまだそれを知らなかったか、または他に理由があって防備を強化したのであろう。翌天正二年春には、総堀を浚い、塁壁を修補したことが「武徳編年集成」に載っているので、そのころ城下町を保護する総堀が存在したことがわかる。城郭研究会の方々の話によると、監物堀の内側に塁濠の跡があるという。

上記の文中にある二の曲輪は、『関八州古戦録』および『北越軍談』では上杉憲政が北条氏に逐われて春日山城に逃れきたり謙信に頼ったとき、謙信は二の曲輪の内に居館をつくろい住まわせたという。天文二十一年正月のことで

ある。謙信はすぐ上野国へ兵を出し平井城を回復して憲政を入城させたが、前記のごとく永禄元年五月、憲政は再び逐われて春日山にきた。御館はそのために造営し住わせた邸である。二の曲輪はまた元亀元年（一五七〇年）北条氏から送られた人質で養子になった三郎殿景虎（氏秀）の邸があったところで、『関八州古戦録』巻之八、上杉三郎景虎の事、巻之十、春日山城動乱の事に二の曲輪と記してある。故址は現在三の丸という標示の立っている曲輪であって、その曲輪は大小三段の平地からなり、中段の密林の地が三郎殿屋敷と言い伝えられている。それに先立ち、謙信の姉仙桃院は永禄七年（一五六四年）夫の死後十歳の景勝をつれてきて、この二の曲輪つづきの帯曲輪に住んでいたというから、三郎殿屋敷の下の標高一四四メートルほどの平地に屋形があったのであろう。

三の曲輪の位置は、二の曲輪即ち現在三の丸と呼ばれている曲輪の下方の尾根に、よい井戸と削平地があり、上方の実城、二の曲輪とともに上越平野を正面に瞰下しているから、それであろうか。

上記のごとく景勝は御中城様（なかじょう）と呼ばれたが、中城という小平地が北側中腹の千貫門址といわれるところの下、老母屋敷の上にあって土塁も残っているから、景勝は成長して謙信の部将になるとそこに住んだのであろう。三郎景虎が二の曲輪に入る時、景勝は十六歳でもう元服しているから当時すでに中城に住んだと思われる。謙信の天正三年（一五七五年）の軍役帳によると、景勝二十一歳の部隊は諸将中もっとも有力で、

「御中城様、鑓二百五十丁、手明（てあき）（徒士の侍）十人、鉄炮二十丁、大小旗二十五本、馬上（騎馬侍）四十騎」

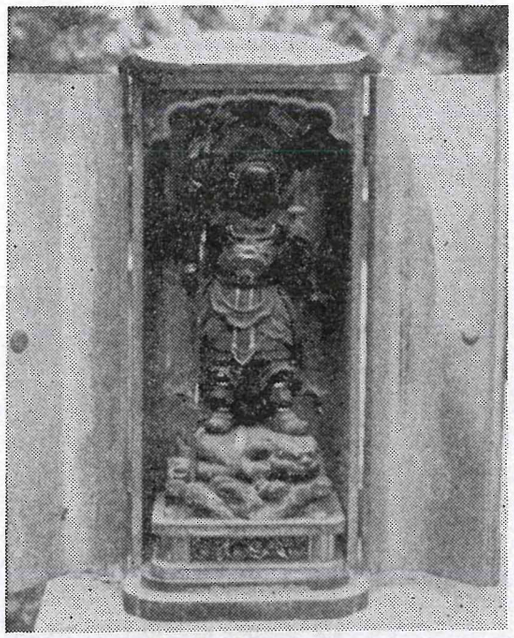
という大部隊であった。

前記の「春日山城址調査報告書」に見えるとおり、実城と呼ばるべき山上は細い尾根で、それを削平して曲輪を造成する場合、その縄張はほとんど一定し、城主の交替するごとに大きな変更が行われるような地形ではない。現在本丸と呼ばれている最高所は以前は「御天上（おてんじょう）」と呼ばれ、東西二十一メートル、南北三十二メートルのやや長方形の土地で、仮りに七間に六間の武家屋形の主殿を一棟建てると、周囲の戦闘用の空地は少ししかない狭さである。その南隣の現在天守台と称しているところは昔の地図では櫓台と記され、昭和四十三年夏、室岡博氏を指導者として発掘した結果、三間に四間の建物の掘立柱の穴が出土した。報告によると穴の径三十ないし四十センチ、深さも三十ないし四十センチではじめは五十センチもあったろうという。柱の間隔は（真々と聞いたが）一・七ないし二メートルすなわち五尺六寸ないし六尺六寸であった。近年発見された高安城

の倉庫はいずれも三間に四間であるから、これも倉庫で上層は展望用の矢倉だったろうか。そして下方からここと本丸との間の凹地へ登ってくる道は、この曲輪の東斜面を斜めに上ってくるが、斜面の上端には土塁があったと見えてそのところの土は他所から運んだ盛土であることも分った。この塁上から弓鉄炮や石でねらわれた敵は上ることができない。茶屋の平地から本丸と毘沙門堂の丘の間へ登る道もあるが、これを登れば両方の丘から十字砲火を浴びなければならない。

本丸の北は米沢上杉神社所蔵図に「上厩」と記入されている小低地をへだてて毘沙門堂址の小丘がある。標高一七六メートル、広さ東西十八メートル、南北二十五メートル。南へゆるく傾斜している。毘沙門堂は上杉家が会津に転封になったとき、山下に移され、さらに高田に築城されたときにその寺町一丁目へ移された。建物は焼失したが寺伝によると、永禄三年（『北越軍談』では天文二十一年）謙信が建てたもので、六間四方、周囲の縁はうぐいす張であったといい、米沢上杉神社所蔵春日山城図には「二階屋敷」と書入れてある。したがってその姿は太田道灌が江戸城に建てた静勝軒（佐倉城に移されていた）と同じく、下層六間四方上層三間四方で金閣の中層と上層を模したものだったかと考えられる。そして、それだけの建物をここに建てると周囲の空地はやはり狭く、堂守の安養院という僧の庵室はここには設けられず、すぐ北下の現在不識院といっている平地に設ける他はなかったろう。その北下に「御花畑」という紅萩の多い平地があって、標高一六八メートル、長さ三〇メートル、幅十八メートルある。御花畑は仏前に供える花を栽培したところであろうか。その下に門曲輪と呼ばれる小平地があるが、実城の北限であろう。その下に直江屋敷とか、馬屋とかいう細長い平地と千貫門址がある。それも二の曲輪のひとつだったかも知れない。

毘沙門堂は謙信の生活に重要な意義を持つ仏殿で、ここ



上越市寺町毘沙門堂に伝来する謙信念持仏毘沙門天

に掛けられていた大きな毘沙門天画像と、ここに平素安置されていた紺地に赤い日の丸の天賜の御旗と毘の旗、および上杉家重代の五挺の槍とは現在も上杉家に残っている。謙信は長時日ここに籠って修行をし瞑想を深め、また諸臣を集めて毘沙門天の前で誓約をさせたりした。寺町一丁目の毘沙門天惣持寺にも謙信公念持仏の毘沙門天木像が伝来するが、これは高さ一尺あまりの小さい厨子に入っており軍陣に奉持して行ける大きさの仏像である。住職の談によると近年まで毘沙門堂の戸の金具を持っている人があったという。世に出れば幸いである。

春日山城内防備に関する謙信の書状が幸い少し残っている。有名な川中島一騎討のあった年の前年、永禄三年八月二十五日付のものに、「一、春日山要害普譜等不レ可レ有二油断一事」「城山竹木不レ可レ被レ為二剪採一事」の文句が見え、永禄五年二月二十七日付で関東から留守役の蔵田五郎左衛門に送った自筆消息に（以下いずれも漢字まじりに書き改めた）、

「そこもと府内（直江津）春日の火の用心の事、かすがのやまのふしんの事、倉仕末方直江（大和守景綱）荻原談合いたし、かたくこれを申つけへく候」

とあってそのころようやく普請が本格的になってきたらしく考えられ、同七年三月四日付で前橋城から書送ったものに、

「下の倉にいれさせ候代物どもいづれをも実城に置くへく候」

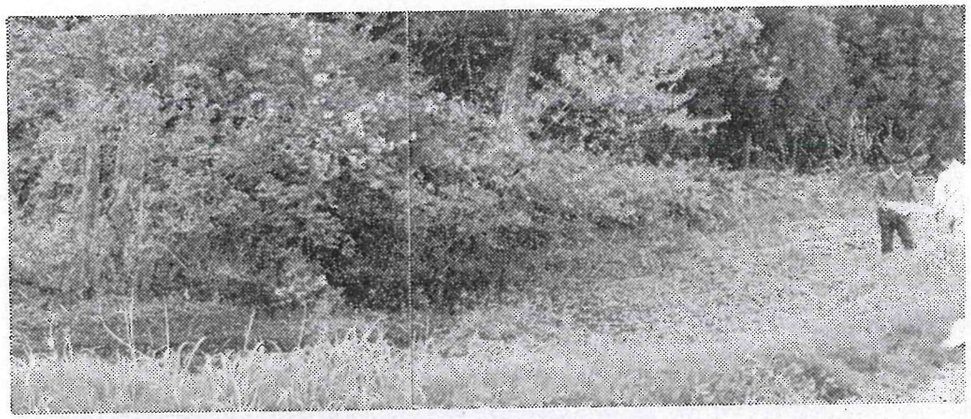
とあって代物すなわち銭を山上に移すべきことを命じ、鉢ヶ峰（すなわち春日山城）を枕に討死する覚悟ならば少数の兵でも堅固に籠城できると書いている。

また同年八月二十四日付信濃からの書状には、

「府内春日火之用心無二油断一其心懸専一候。大門大手門何も急度可二申付一候。普請以下是又愈不レ可二油断一（中略）追而門番以下急度可二申付一候」

とあって大門、大手門、門番などこのころできたことがわかる。城下の林泉寺の惣門となっている薬医門は春日山城の遺構で、元亀年間謙信が城の裏門を寄進したものと伝えられるが、元亀年間といえば永禄の次の年号であるから、新築城で不用となった門を寄進したのであろう。この門の向って右の本柱が真直ぐでなく、基部が少し曲っていることなど用材を思うように選べなかった乱世の遺構であることを物語っている。

謙信の本邸　さて山上の謙信屋形の問題であるが、天守台という丘の南に二つの堀があって底に水があるが、堀と堀の間の小丘は鐘楼址といわれている（標高一六六メートル）。その南の小丘は標高一六一メートル、景勝屋敷と呼ばれるが東西二十メートル、南北七〇メートルの狭長な土



屋形址の大池（植木宏氏と増村孝雄氏）

地で池田嘉一氏も指摘されたとおり、大屋形の建つべき平地ではない。それでも最初屋形図の発見された当時、著者達はこの地名に引かれて、それを屋形の一部と考え、西方の段々畑を昔は一個の平地であったかと推考して、その辺一帯を謙信公屋形跡と仮定し、その地形と図を基にして推定復元図と模型とを作製した。そして「歴史読本」昭和四十八年九月号に発表したのであった。果然それは評判となり香川県鳴戸市の城郭研究家、本田昇氏は、現地を昭和五十一年末踏査した結果、その段々畑に多少の土塁が残っていることを発見されて、著者に実測図を送ってくださった。寒中といい、うっそうと繁って著者も入れなかったジャングルに入って調査された研究に驚嘆したのであるが、それとともにこの段々畑の地形は古来のもので一の平地が崩れてできたものでないことがわかってきたのである。となると御実城様屋形の故址は他の平地に求めなければならなくなる。このとき記憶に浮んだのは昭和四十七年九月十七日に秋雨に濡れながら、景勝屋敷の南下十一メートル、広さ六六メートルに五六メートルある平地を歩いて通ったときに、春日山の主と称されるほど城址に詳しい春日山旅館の大島善吉老が独り言のように「ここが山上で一番広い平地です」といった言葉である。その語気にはここが大きい屋形の建つ唯一の場所だと考えている感じがあった。そのときはそこには柿崎和泉守屋敷址という標示があったのをそのまま信じていたのであまり注意しなかったのであるが、今やその言葉が大きく思い出されてきた。また、そのとき同行の室岡博氏が帰途、その辺に大きい門址が残っていると言われたことも思い出された。そこで「上杉謙信公の足跡」という本の挿画になっている実測図を調べると、その平地の広さも形も屋形図に合致するよ

屋形址中央の井戸址と思われる地点を発見した室岡博氏（昭和52年5月17日）

うに思われた。しかしそこは春日山城の地図では隅の方で精密な点が記載されていない。そこでその翌年五月十七日室岡博、植木宏、増村孝雄の三先生の御同行を得て現地調査を試みたところ、その平地こそ門址といい、大池といいまったく屋形図とよく合致することが発見され、中央の井戸のあったと覚しい地点に室岡氏が細い竹を突き差して見ると深く通って、井戸の穴の跡らしいことを突き止められたのである。米沢市上杉神社所蔵の春日山城図は種々な点で一般のものと異る記入があるが、一般の図ならば景勝屋敷と記入されている辺に「御前屋敷」と記入されているのも注目に値する。

五三頁の図は植木宏氏が杉田、丸山、柳沢の三氏と実測されたこの平地の地図で、五二頁の図は本田昇氏の実測図である。屋形図と比較対照すると興味が深い。

屋形図と推定復元模型　まず屋形図のスケールを考えると、中央左寄りに大広間や上使の間のある御殿群があって、これが表御殿、御対面所に当る。御対面所、すなわち主殿の広縁は幅一間あるのが昔の定型で、その一間は柱真々六尺五寸位、すなわち大体二メートルが普通であった。そこでそれを基準として図全体を測って見ると前記の平地と比較的よく一致することがわかる。ただ今日の建築家の製図と異って、昔の図は不正確なのが普通で、この図も細

かく見て行くと不合理なところが発見される。まず広縁を幅一間とすると大広間の幅がわずか一間半となって狭すぎる。定型により三間四方の間を二つか三つ並べることは無理だったとしても、少し図よりは広かった筈であろう。その前の「白洲」と書き入れた庭の南方に土居があって、「高二丈、敷二丈」と書いてあるが、敷すなわち堤の底の幅を二丈に拡げて見ると、不識庵が西へ押しやられてしまう。不識庵は謙信の修養上重要な建物で、図を見ると東北に護摩殿があり西北の板縁が東へ少し入り込んでいるのは、仏前に捧げる花や水を準備する閼伽棚の場所であろう。不識庵の位置は大切であるから、その位置を図のとおりとする。そしてその建物と堤の裾すなわち下端との距離を図のとおりにすると、自然に堤は東へもっと移動させなければならなくなる。

図の西北にある一群の建物は大将の間をはさんで寝所と召替の間があり、隅に長囲炉裡のある評定の間があるから、この一帯が謙信の平常の住居であり、南の三室つづきの広間は内の対面所であろう。月光殿と記入された室があり、その正面奥に御仏間と記した仏壇かと思われる張出しがあり、右に軍書棚がある。この室は有名な看経（かんぎん）所であろう。謙信はここで看経もし軍書も調べたであろうが、仏壇には厨子を安置して多くの仏像を納めてあったであろう。謙信が看経所の諸仏に祈願をこめた文書が数通残っているが、いずれも敵の罪悪を指摘し、自己の清廉潔白を述べて仏敵を滅ぼすことを祈ったものであって、その仏の名は阿弥陀如来、千手観音、摩利支天、日天、弁財天、愛宕、将軍地蔵、十一面観音、不動明王、愛染明王と多い。上杉家にはそれらの小仏像を納める厨子がいくつか伝来しているが、五四頁の写真は謙信の重臣柿崎和泉守所持の厨子で、その居館址に建つ楞厳（りょうごん）寺に伝来する。厨子のなかには十一体ほどの仏像を納めながら、高さ三七センチに幅二七センチという小型で戦陣に運ぶことのできるものであり、謙信の厨子もこうしたものであったろうと想像される。

看経所には大般若御太刀と称する守次作の宝刀が納められており、謙信は毎月十六日大般若を執行するときこの太刀を帯びた。

この謙信の常の御殿の東には北に馬屋、南に作事場があり、作事場には「謙信公御成間」と記入されているから一合戦あるごとに鎧の修理や刀槍の研磨を行ったところであろう。しかし御殿との間隔が狭くて、軒の出を半間としても軒と軒が衝突してしまうから、建物の間はもっと広かったであろう。

屋形図には東へ石垣が張出して風雅な花頭窓を備えた楼閣がある。謙信の伝記として多少の誤伝はあるが比較的信

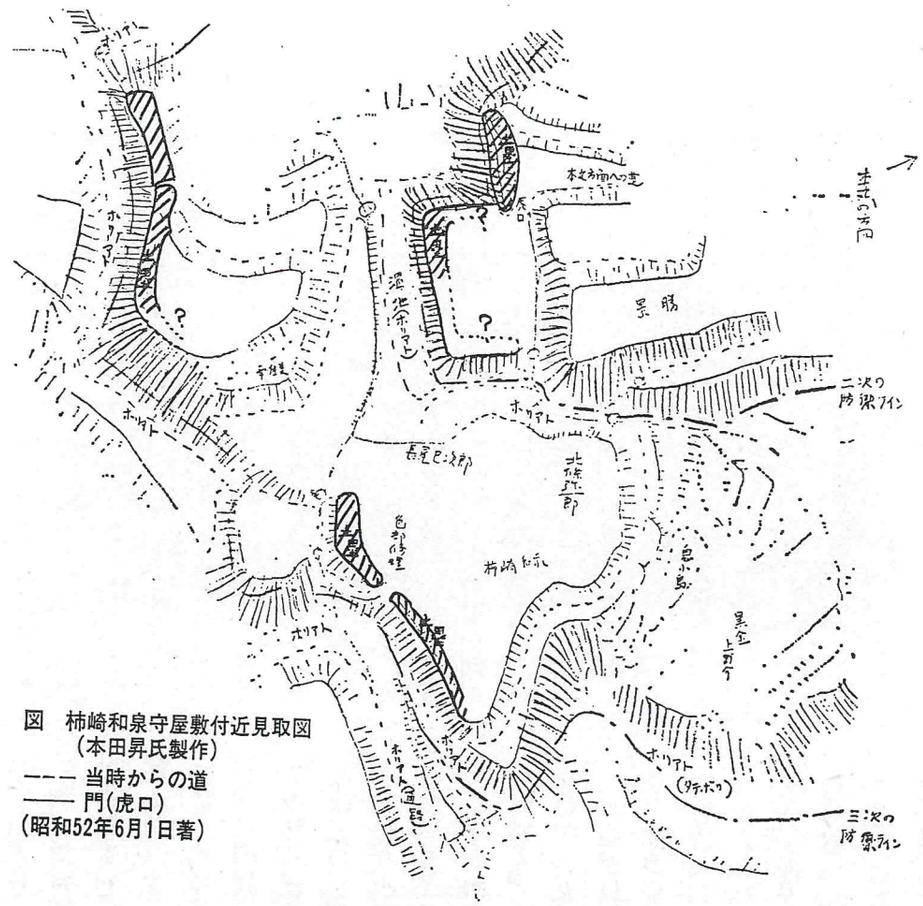
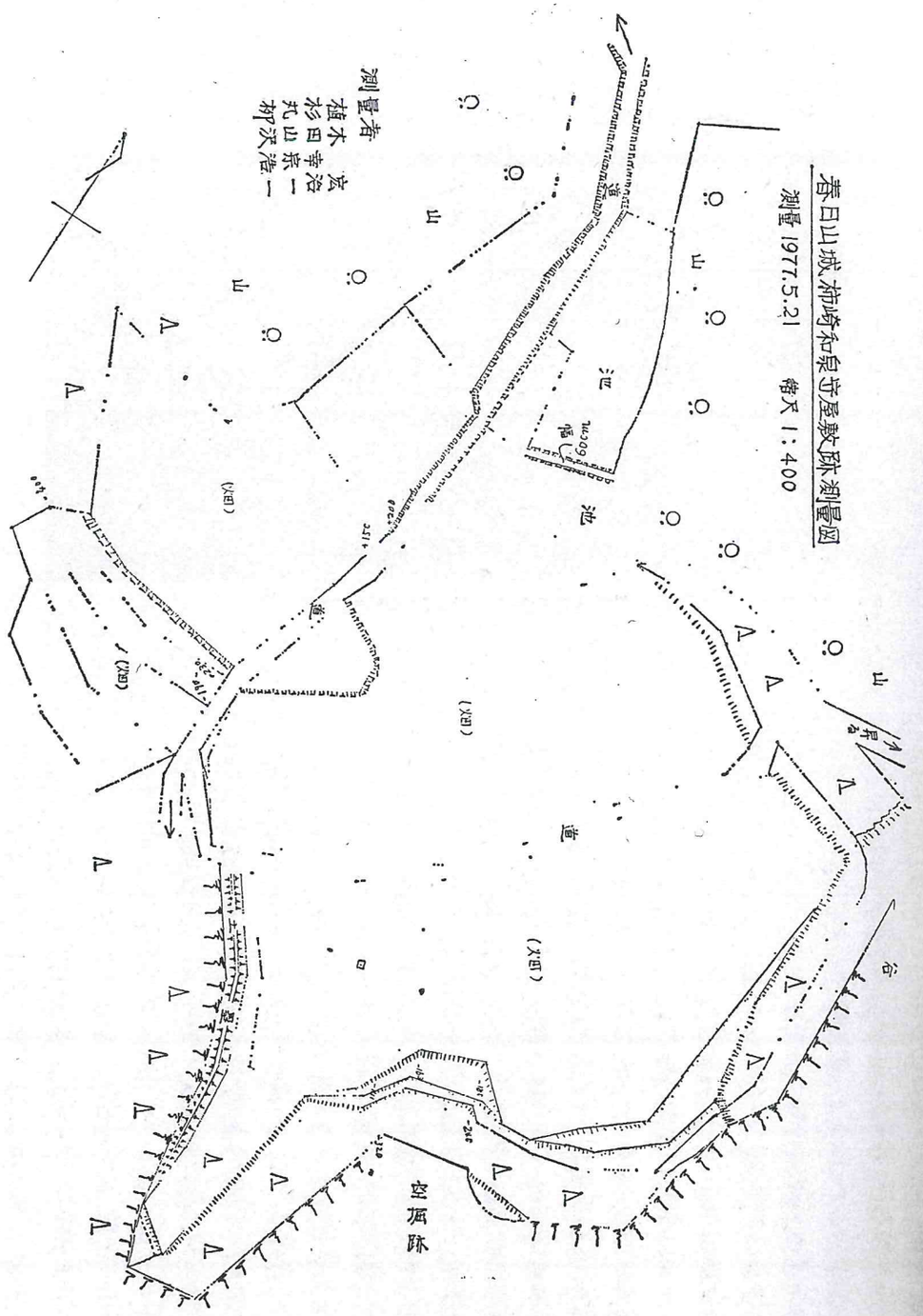


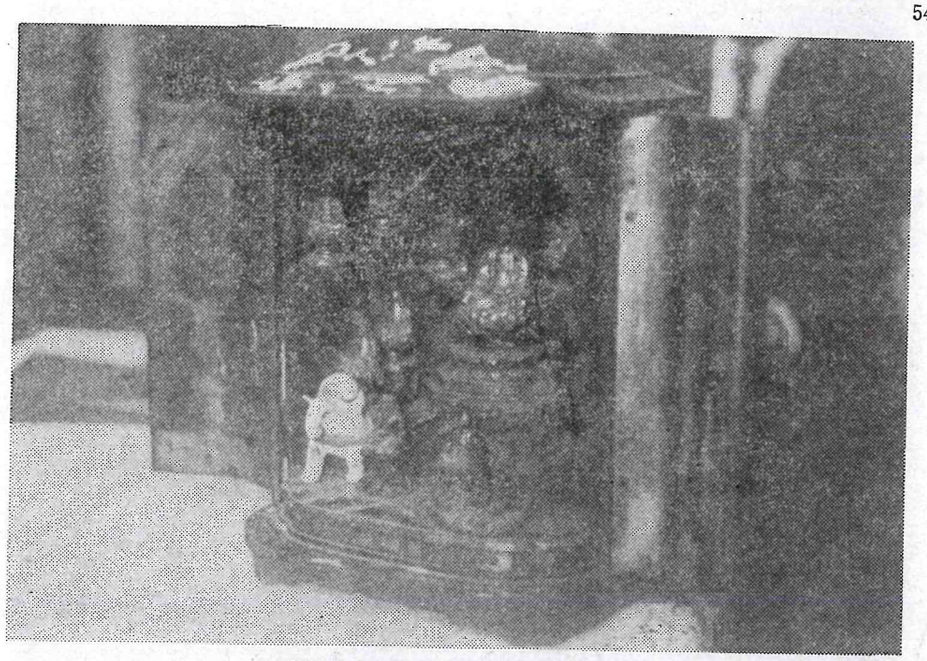
図　柿崎和泉守屋敷付近見取図
（本田昇氏製作）
――― 当時からの道
―― 門（虎口）
（昭和52年6月1日著）

柿崎和泉守屋敷付近見取図（本田昇氏製作）

用されている『北越軍談』によると、春日山城には「橘亭（ノチン）」という建物があって、小田原攻囲のため関東へ出るに先立って一族諸将を春日山城に集め橘亭で数回密談の上、衆議評決、出陣したと伝え、『関八州古戦録』巻之四も同じように記している。軍談巻八に「伝に曰、景虎公平素大抵の軍議は兵談所（屋形図の評定所か）にて御沙汰を歴らる。密策の事に於ては橘の亭（チン）へ有司を召し御内談なり。故に他人の漏れ聞く事曾（かつ）てなかりしと云々」ともある。永禄四年、川中島一騎討の決戦に出陣するときも橘亭で七月一日作戦を決定したという。永禄十一年六月中旬、春日山の橘亭において納涼の飲宴をなし、立山叟（山内上杉憲政）を饗し、村上義清父子その他の歴々老臣以下数輩侍座して献酬交互し、一座の人興を催し賓主円居して往事の雑話刻を移したとある。巻三十四には或る時橘亭で月見の興を催して、琵琶法師石坂勾当を召して平家の鵺（ぬえ）の段を語らせ、謙信が世の武道の



春日山城柿崎和泉守屋敷測量図
（測量者，植木宏氏・杉田幸治氏・丸山宗一氏・柳沢浩一氏）



柿崎景家の厨子（柿崎町楞厳寺伝来）

衰えたのを歎いたことを伝えている。

そこで屋形図に見える楼閣があるいは橋亭かと考えられるが、故址と見られる平地にはそうした張出した土地もなく、また図の方々に見える石垣もまったく残っていない。発掘したら根石が出土するかも知れないが、あるいは一切を直江津の福島築城に転用したかも知れないとも思われる。

屋形図はこの美しい楼閣の他に、門その他に矢倉の画や、「矢倉」と記入した方形を記入してあるが、いずれもはなはだ小さくて図上の寸法では幅が四尺位しかないものもある。それではなかに入って城外を射撃することは思いもよらないから、それらも堤と同様にスケールを小さく描いてあるに相違ない。こうして御殿の周囲を必要なだけ拡げて行くと平地の実測図に合致してくるようである。

常の御殿の北、召替間に続いて「御二便所」が記入されているが、便所をここだけ記入して他の便所を省略しているのは、ここが謙信が脳溢血で倒れた場所であることを示しているのであろうか。注意すべきはその周囲から東方の厩にいたるまで厚い壁のような太い線が記入されていることである。その北に山を描き「鉢ケ嶺ツヽキ」と書いてあるのはそれが現在の景勝屋敷で、万一ここから便所、御評定間などを見おろして、射撃されることのないように防壁を設けてあったことを示すものであろう。そうした壁なら

ば発掘によって土台が発見されるかも知れない。

西の門の辺に高石垣と石段を描いてあるのも、西方の台地から見おろされるのを防ぐためと解釈できる。

この時代の表対面所の広縁は端から一間四方の中門が突き出ているのが定型で、この屋形図もそのとおりであるが、それが普通直角に出ているのが少し斜めであるのは狭い山上だからであろう。安土城本丸の表御殿（江雲寺御殿）の中門も礎石によると斜めに出ている。春日山城の中門の前に堤と記した小丘があるのは、唐門から入ってくる人目から中門での動静をかくすための工夫と思われる。

武家屋形の定形としては、中門につづいて奏者の間があり、ついで遠侍があって古くはその裏側は七間の馬屋であったが、春日山ではそれがハッキリしない。中門から縁つづきの「侍番所、大将出立之間」がその役目を果しているかと思われるが、『北越軍談』巻第三十八に天正四年十二月中旬本丸遠侍での刃傷事件を伝えている（この本丸は御天上かも知れないが）。

「春日山本丸の遠侍に於て勤番の壮士口論し刃傷に及ぶ。是に依て其一族親昵の輩双方の宅地え駈集り、城邑聊（いささか）騒動す。加治遠江守景英（永禄五年春日山武者所に補せらると同書にある）有司に下知して少選（しばらく）の後静謐（下略）」

図の謎は抜穴である。北寄に大池が描かれているが、故址には浅いがもっと広い池があって旱天にも涸れない由である。浅いのは水田に改めようしたことがあるためかという。そして西北方一段低いところにも、それは屋形外であろうが、茗荷の生えた池がある。この図上の池には、

「堤長二十間余。水底二丈下ニ長九間広六尺ノ橋アリ此下ニ水門アリ此戸ヲヌケハ鶴ノ間ノ井ヘ水ヲ引橋ノ上水五尺ニナル」

と書いてあるのだが、実に不可解な文で、水底の下に橋、それも周囲二十間余の池の中に長九間の橋があるというのは不合理だし、鶴の間の井戸へ水を流し出すと、水が橋の上五尺になるというのも不合理である。

発掘したら謎が解けるかも知れないが、いま仮りに、水底まで池の深さ二丈とし、中に九間の円い堤を設けてその切目に六尺の橋を架し、その橋の下に水門を設けたものと考えた。そして上を下と暗号式に書いてあると見て大池の水を抜穴を通して鶴の井へ流す場合、水面が橋の下五尺になると解釈して、模型をそのとおりに作って見た。

「鶴の間の井」というのは屋形図の表御殿と常の御殿との間の空地に書き込まれており、間というのは坪という意味と解される。つまり建物に囲まれた小空地である。その井戸に記されている文字は、

「深サ七丈余。三丈下り五尺四寸ニシテ堤迄抜穴アリ

水出ス」

とあって、その抜穴の口は前記の大池の底より一丈低い位置にあって必要のあるときに水が出るように仕組まれていたわけである。「五尺四寸ニシテ」という語がわからないが抜穴の口の高さであろう。現在方々の城に抜穴が残っているが、いずれもがかがんでとおれる高さである。謙信公屋形図のこの井戸は台所から遠いから、あるいは抜穴の口で、忍者が出た後は必要によって水を注いで行方をわからなくする工夫であったかと思われる。

注意すべきはこの屋形には女性の住む大奥がない。それは謙信は妻帯せず、春日山城内にいる女性は姉の仙桃院とその数名の侍女だけであり、生母青巌院（俗名を清といったという）は天文年中、謙信がこの城に入るのと前後して長岡市に近い五庵の谷に移り、そのまま永禄十一年五月十一日に逝去しているから、老母屋敷にいたとしても短い期間であり、あるいは老母屋敷というのは、後年景勝が城主の時代の姉仙桃院の住所だったのに由来する名かと想像される。仙桃院は景勝とともに会津へ米沢へと移り、慶長十四年二月逝去したから、ここに住んだとすればもっとも長く住んだことになろう。

そこで屋形の北裏の山に景勝屋敷という名があるのに根拠があるとすれば、謙信の死後越後が大内乱に陥り、武田勝頼を味方にするためにその妹菊姫を迎えて妻としたから、その夫人達の住所としてこの高地が用いられたかと考えられる。米沢上杉神社所蔵の春日山城図には、この曲輪に「御前屋敷」と記し、他にも「二の丸、御前屋敷」と記入したものがある。最も古いといわれる元禄十五年図には「二ノ曲輪」とある。

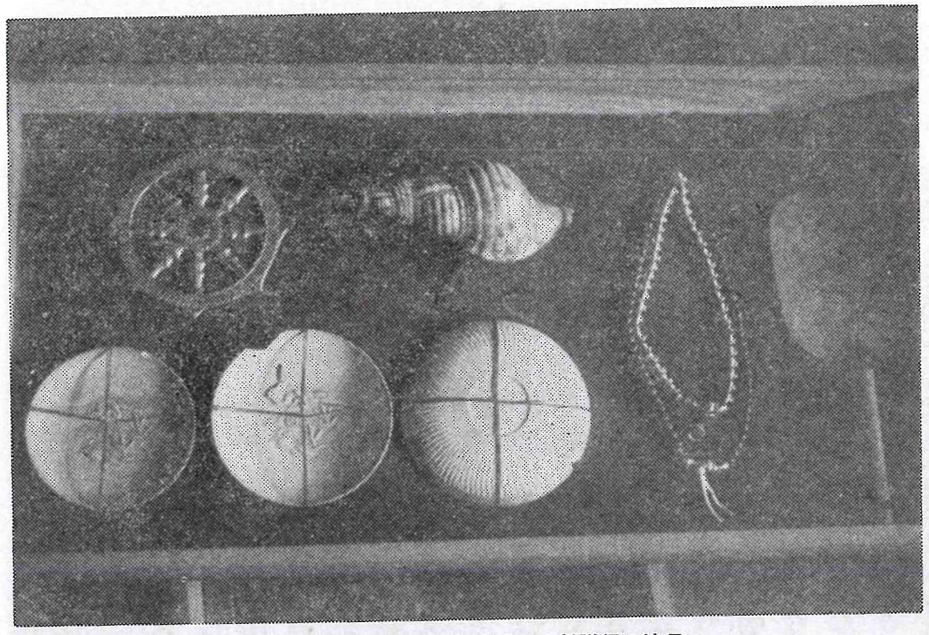
もうひとつの謎は「軍庫」の下の記入。

「此下タ三丈下リ二十丈余ノ堤アリ其西ニ直江カ曲輪七十五間ノ地アリ、是ヨリ春日山ヘシノヒノ道アリ」

である。故址ではその軍庫のあった筈の場所から南へ東へさらに北へと道のような段が続き、「鬼小島」その他の地名のあるところに達し、現在「御成道」かと言われている細い路が春日山本城に通じている。その堤の長さはおおよそ二十間位であるから、鬼小島のあたりの段々畑の少し広い平地が、家老直江大和守実綱の城内における邸であったろうか。七十五間の間は「ま」で坪であり、それ位の平地は残っている。「上杉将士書上げ」に大和守実綱のことは、

「直江入道酒椿が子にて、童名神五郎といふ。（中略）幼少の時より謙信左右にありて度々の事にあいたる者に候」

とある。彼は謙信の死後天正九年城内の槿（むくげ）の間で暗殺され、木曽義仲の忠臣として有名な樋口兼光の子孫という樋口重光が、実綱の美しい娘の「船」を妻として嗣いで山城守兼続となり、景勝の片腕となったのである。槿の間といえば障壁に槿を描いた間のようであるが、槿はこの地方に多い木なので、家老詰所の庭に槿が植えられて風情を添えていたのかも知れない。もっとも『北越軍談』巻四十では暗殺を七尾城でのこととし、朝顔の間としている。古くは槿は今日の朝顔のことであったから、ここにいう槿もそうだったかも知れない。



上越市寺町毘沙門堂に伝来する上杉謙信の法具

山の中腹には多くの部将名を持った削平地がある。それがいずれも狭小であるのは当然で、江戸の大名屋敷と異り、各部将の妻子や伝家の重宝などはみんな各自の領地の城館に置いたのであるから、春日山城での宿舎は城に詰めているときや用があって登城し、主従数名で何日か滞在するだけの住居があれば十分だったであろうし、住宅の建たない狭長な平地でも野営はできたろうと思われる。「野伏する鎧の袖も楯の端もみな白妙のけさの初雪」は謙信の陣中の作である。

屋形と謙信の生活　七歳で林泉寺の天室光育禅師に師事し、深く帰依した謙信が、第一理想としたことは高野山に入って仏道修行に専念することであった。しかし越後国内の治安はこれを許さず、一生を戦陣に送ったが、城中で平

和を楽しむことができたときは、当時としてはもっとも高雅な趣味を楽しんだ。日本人の心の故郷である京都に二度ものぼることができたのは他の群雄と異り、途中の豪族を滅ぼしつつ上洛しようという心がなかったからで、敵だった本願寺さえもその案内役を引受けた。在京中憧れの高野山に登り、入門灌頂の儀式に使用した金色の法具は現在も前記毘沙門堂惣持寺に伝来している。在京中武野紹鷗、千利休に茶の湯を学んだほか、連歌、能楽、大鼓、小鼓、琵琶もたしなんだ。川中島の戦を直前にしながら一節切（ひとよぎり）の尺八を吹いて悠々閑々としていたと、『北越軍談』巻第二十三が伝えている。漢詩、和歌も多く詠じたが、その多くは御館の乱で失われたという。十間四方も要る能舞台を設ける余地のある屋形は春日山城では、山下の御中屋敷か御館しかなかったろうが、三間四方の書院があれば座敷能は催すことができたし、当時流行の幸若舞はもっと狭い座敷でも楽しむことができた。蹴鞠ももちろん行われたであろう。少年のときに一間四方もある操り人形の城攻の玩具を持っていてよく遊んだが、景勝が天正七年四月勝頼の妹と結婚するに際して、その玩具は勝頼の子信勝に贈られたと『甲陽軍鑑』品第廿、品第五十四に記されている。もしそれが山梨県のどこかに残っていれば幸いである。常の御殿に「寝所」があるが、その庭にこれから攻囲すべき敵の城の模型を小姓に命じて砂で造らせ作戦を練り、「日影を移して」すなわち長時間倦むことを知らなかったという。表御殿の隅「家老の室」の並びに「時計之間」があるが、フロイシュ『日本史』によると、謙信が二度目の上洛をした翌永禄三年（一五六〇年）パーデレヴィレラ等が将軍義輝に砂時計を献じているから、そんな時計だったかも知れない。

屋形から出陣をするときの作法を布施秀治氏の『上杉謙信伝』は詳しく伝えている。同書は史料の正確な点で定評があるが、この屋形図と照合するとき、そのありさまがほうふつとして眼に浮んでくる。すなわち、

「謙信中門の廊より出て徒歩にてまず不識庵に入り毘沙門天を拝して戦勝を祈る。了（おお）って神前に献じた花水を各々腰筒（水刀という）に汲む、これを五沽（ケン）水という」

図には中門すなわち大広間入口の廊の南に白洲と呼ぶ庭があり、南に土居か塀をへだてて不識庵がある。それには「ゴマデン」があるが、護摩の修法には五色の花を立て、その水を霊水として頂く式があって、五色の花を飾る配置は修法の種類によって異るやかましい規則がある。

『上杉謙信伝』によると、謙信はつづいて白洲へ下り牀几に腰かけると、先手の大将が毘沙門の旗を真っ先に持ち出す。屋形図には中門の外、唐門の前に「御旗台」があり、

「御備之場」「陣鐘」の記入もあるから、ここにいう白洲はその広場であろう。ついで二番大将が山内上杉家の重宝八幡の御弓を捧げてでて、三番目に長尾家重代の天賜の日の御旗の白布に包んで箱に納めてあるのを、御旗守の安養院という能化が持ってでて松本坊という修験に背負わせる。この紺地に赤く日の丸を描いた天賜の御旗は謙信の父為景が、天文四年逆徒退治のため再調整を後奈良天皇に願い出て六月十四日付で勅許の通知があったもので、それには「禁裏御旗ノ事」とある。武田家の御旗も同様のもので、錦旗節刀に相当する権威のあるものだったのであろう。謙信は以上三つの神宝の供奉をなして大手門をでるが、そのとき大門小門の間で門出の法螺（ほら）を吹く。それは軍神勧請の貝である。後備、相備の大将が、八幡の矢と御旗箱を受けて輿に納めると謙信が礼拝する。そしていよいよ毘沙門の旗を真っ先に押し立てて進発するが、謙信は馬上に珠数と団扇をたずさえるのを例とした。一陣二陣は先発として進み、本営これにつぎ、ほかに後備、遊軍、輜重の三隊があった。

総勢八千は謙信の定めで、景勝以後も上杉家はこの数を踏襲したが、山上にそれだけの人数を集めて一列縦隊で下山したとは思えないから、大部分は麓の平地に集結していたに相違なく、小峯ヶ原というところは勢揃の場と言い伝えられている。

むすび　天正六年春、謙信四十九歳、春日山に大軍を集結してまさに関東に進攻しようとしていた大切なとき、三月十三日急逝した。公は東郷元帥や乃木大将のような純粋な軍人で、政治の理想はまったく保守的であった。その理想は、京都の将軍は将軍の権威を完全に備えて全国に君臨し、関東の公方は鎌倉に在って東日本を鎮撫するにあった。したがって公は将軍義輝にも義昭にもつねに忠誠の心を失わず、関東では管領山内上杉として、鎌倉に公方を奉じて天下泰平国土安穏の実現に尽力することにあったから、信長による旧秩序の破壊、秀吉、家康によって達成された日本の新政治体制には無縁であった。したがってもしも公が長寿に恵まれたらその後の日本はどうなったであろうか。春日山を進発し三国峠を越えて前橋城に入り、関東の諸大名を召集して一気に小田原に進む。結局、北条氏を降し、武田勝頼も味方にして鎌倉管領の理想が実現するとき、西日本の信長、家康の政策にどう対応したであろうか。あるいは春日山城を景勝に、小田原城を氏秀に与えて、謙信自らは青年時代の理想どおり、高野山に登って一生を仏道修行に捧げたのであろうかと思う。

史実は悲しくも公の葬儀が終るや否やその領地は大内乱となり、養子景勝は春日山城下まで侵入した武田勝頼と和

を結び、競争者の（北条）氏秀を倒してかろうじて越後の主となったが、天正十年勝頼が滅びたときは、越後にも織田軍が乱入する形勢にあって、上杉家は存亡のわかれ道にあった。僥倖にも本能寺の変があって滅亡をまぬかれ、天正十四年六月大坂城に登って関白秀吉に臣礼をとった結果、秀吉薨去後は五大老に列し、関ケ原役には家康と雌雄を決せんとしたのであった。

秀吉の生時景勝は家康らと同様に大坂や聚楽伏見で、すなわち秀吉の城下で生活していることが多かったが、秀吉薨去直前慶長三年春会津に転封になった。表面は増封であるが、実は秀吉常用の政策で、大名をその先祖由縁の土地から切り放して、かわりに豊臣親近の大名をその跡に封ずる謀略の一例であるとともに、徳川家康を背後から牽制する目的であったろう。その景勝在城正味二十年の間に春日山城の改築をした記録がない。上杉年譜にわずかに転封一年前の慶長二年二月十八日付で黒金上野、岩井備中そのほか少給人まで百石に付して五人役之分に申付け、所々御門、橋以下破損之所の修理を命じたとあるのみであるから、当時最新式の広い水堀に高い石垣、その上に白壁に瓦葺の矢倉や塀の美しく映える城郭は造られなかった筈である。

上杉家の会津転封の後へ秀吉の股肱堀秀治が入城した。名君と呼ばれたが、同十一年死去し、忠俊が嗣ぐとすぐ翌年春日山城を廃して海岸の福島に城を築いて移ってしまった。近世大名の城としては春日山は古風すぎて不便だったに相違ない。しかし春日山の北東に監物堀という広い水堀が残っていて、山麓の根小屋の外構の形をなしているのは、堀監物直寄の設けた多少とも近世式の外曲輪なのであろう。その水堀の南部は西へ屈曲して、前記「御中屋敷」の西辺をなしているのは中屋敷の藩主別邸を避けているように見える。

北条氏康公時代の小田原城